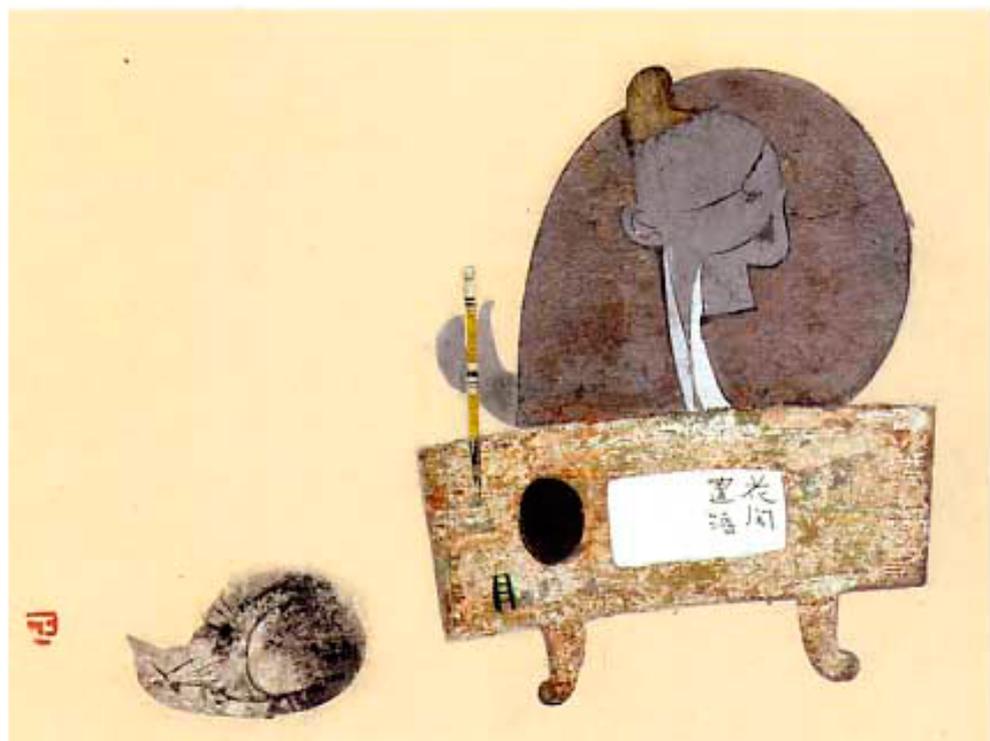


火星



平成20年3月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

羊齒叢のよき日向あり針供養

雪の田を人の照りくる針祭

いきなりの日差しありける雪兎

青年団に女ごゑある雪間かな

パン工房雪解しづくに囲まるる

墓あれば鴉の声す雪解谷

蹠がうすらひ踏みし音なりし

寒戻りけり水底のごはん粒

水仙の島へ纜放られし

春の風邪人にならひて水覗く

平成十九年度火星賞作品自選二〇句

ぎんなんや澱まず澄まず神の水
橋の上に鯰見てゐる十二月
男山やまふところの柚子湯かな
笑ひすぎたり山茶花のこぼるよ
波しぶき立つ年の瀬の葬かな
夜回りの木の音のとどく雛かな
盆梅に屏風の天地ありにけり
野球少年大き雪間にあつまれり

丸山照子

重箱を四角く包む臙かな
つちふるや四方に襖絵めぐらせて
鳥籠の布一枚の明易し
ぼうたんへ面舵とりし飛行船
たけなはと言ふしづけさの薪能
走り茶の香たどれば鳳凰堂
いにしへの火の匂ひせり大夏野
砂浴びの鳥に土用の波がしら
流れ橋よりつづきけり天の川
蜘蛛の囿に三日蜘蛛ぬ秋の風
青蘆原水搔くさまにわたりけり
さそり座の尾の触れてゐる糸瓜棚

渡り

山田美恵子

鍋に昆布漬けあり山の眠りをり
バイク屋の灯の前通り秋の雨
新涼を言ひつつ袈裟をたたまるる
柚子湯でて母に集まるパジャマかな
遠ければ花野にしづむ遊女塚
花野より大花野へと馬の貌
覗きけり男二人の茸籠
鳥渡る運動場に莫産ある日
手種にす明日香土産の烏瓜

屋島山巔水鳥の来てゐたり
またひとりかはらけ投げる枯木山
銀翼の重さ地を這ふ大枯野
腕に鷹抱へし顔に風花す
冬銀河の乱れをしづめオカリナは
まほろばの夕日なびける寒波かな

家の近くに、鷹の渡りの観察地点がある。毎年野鳥の会の人達が、日がな一日空を仰いで、渡りを数えている。私には黒い点にしか見えないが、のすりや刺羽を識別しての観察だ。鷹は、この山からも上昇気流に乗り、ゆつくりと空に揚がって行く。たまに、鷹を腕に乗せて歩いている青年に出会う。人を寄せ付けぬ気高さに、声を掛けることは出来ない。いずれも鷹にロマンを求める眼を感じる。

太白星

柳生千枝子

年暮るる独り住居の底にゐて
初湯出づ吾子のま白き足の裏
新しき年の始まる空の銀
新年といふ残月の真珠いろ
初句座へ出づる独りの戸を閉ざし
初句会てふ銀色の陽が溢れ
臘梅に淡き光背あるごとし

杉浦典子

荃石に指かける窪ありにけり
牡蠣割女大き薬缶の湯を飲めり

鳩つれて日向に移る飾売
煤逃の帰りのバスに乗り遅る
鳩の足赤し落葉を踏んでゆく
足馴らしの夫と出できし年の市
駅伝の折り返し点風花す

浜口高子

火の山の風まつすぐにお茶の花
ギヤマンの皿に塵泛く十二月
羽子板市の裏通りなる玉麩椀
助六が箱より出さる羽子板市
髪染めてはるばる来たる羽子板市
能面展出でぬ埋火爆ぜしとき
山茶花の一輪浅草橋の下

火星作品

山尾玉藻選

終の香に乾きけり素焼皿
山陵の四方に定まる十二月
鯛の尾の撥ねしかたち凍ててをり
竹林の色をぬけきし雪ばんば
奥の間を猫の覗きぬ年の夜
教会の椅子に脱ぎある裘
枯葦にしはぶきひとつ置いてきし
黄檗は男松ばかりの冬構
革ジャンと別の日向の鳩の数
チエロ弾きの去にたるあとの枯木星
極月の子規碑の前の竹箒
御祝儀の手締めの外懐手
裘銀座に月を置いてきし

明石戸栗末廣
八幡丸山照子
坂口夫佐子

盆栽の太き根上がり山眠る
毛衣をダウンライトに預けけり
川原石ことごとく白雁渡し
屋根の上の猫に風邪ごゑ応へけり
蹠の紅の三角しぐれ来る
ゆりかもめの止まらぬ杭の冬ざる
電飾のつまづくところ虎落笛
化野に人の声ある寒さかな
年の瀬を大正ガラスに遊びけり
顔見世や白鷺にたつ波がし
曳売や冬の日和の栗田口
縁側に子供ぶとんの仕上げあり
とんとんとはゆかぬ階段年忘
猟銃の音ゆきわたりたる日和
猪撃ちの一系列となり柚の道
クリスマス近し歌劇の町の花舗
民宿の犬の先導霜日和

豊中
廣畑
忠明

八幡
奥田
順子

宝塚
松井
倫子

選のあとに

山尾 玉藻

竹林のいろをぬけきし雪ばんば

戸栗 末廣

「竹林のいろ」とは竹林の奥の色であつて、作者の視界には捉えられていない。「雪ばんば」だけが眼前に現れたのである。「雪ばんば」のたおやかな緑青色を示す手立として、省略を効かせた「竹林のいろをぬけきし」の表現をとつたのである。巧みな技で俳句という器を無理なくびたりと満たしている。同時作へ松の香に乾きけり素焼皿も同工で、良質の抒情を感じる。

革ジャンと別の日向の鳩の数

丸山 照子

「革ジャン」と「雀」は全く異質のモチーフである。少々特異な存在が「革ジャン」であり、ごく平凡な存在が「雀」である。言わば晴と曇の存在である。しかし、その二物は同じ陽光を浴びていることよつて無意識の内に関り合い、違和感のない空間を作っている。全てのものを一つにする懐の深いものが「日向」なのである。敢えて「別の日向の」と断つて、逆にそれを強調しているのである。

極月の子規碑の前の竹箒

坂口夫佐子

吟行を共にした浅草寺での囁目であろう。発見や感動を伝える作品ではないが、ものを凝視しているとそこに自ずから詩が存在することを気付かせてくれるような作品である。何と言つてもひびきのある「極月」の季語が絶対で、作者の思

いの深さが伝わってくる。同時に、子規に深く繋がる心情を共有する喜びをしみじみと味わうことができた。

蹠の紅の三角しぐれ来る

松井 倫子

水中でも陸上でも水鳥の蹠はかなり不細工だが、そこがまた愛らしい。掲句の「蹠」は杭に止まっているものか陸に上がっているものか、いづれにしても「しぐれ」に濡れた「紅の三角」が鮮やかで印象的である。俳句を作るということは対象をことほぐことであり、掲句にはその姿勢を見て取れる。

化野に人の声ある寒さかな

奥田 順子

京都小倉山の麓の「化野」は、平安時代までは風葬の遺骸が野ざらしになつていた地である。自ずとそこはかとない悲しみを覚える地であり、作者もそんな思いにとらわれていたのだろう。一見「寒さ」は即き過ぎのようではあるが、現実的な「人の声」を耳にした作者の一瞬のこころの動きが窺え、共鳴を呼ぶ心理的「寒さ」である。

とんとんとはゆかぬ階段年忘

廣畑 忠明

作者ご自身は周囲が驚くほどの健脚の持ち主であるから、同年配のお仲間の足つきを見られた折の感慨と察する。居酒屋などの階段を上り降りする少々危なっかしい足取りが見える。「とんとんとはゆかぬ階段」の楓々とした表現に、ヒューマンなほろ苦さや佗しさが感じられる。構えない括淡な表現にそれとなく自己を投影した世界、これはこの作者独自のもの。

恒星圈

戸田春月

かいつぶり固くなりきし紙懐炉
木枯や湯呑に茶柱立つことも
革手袋胸のボタンをかけ違ふ
立読みの本屋の奥に湯冷めせり
釘ねじ穴かへて初暦

田中みのもる

長屋璃子

寒柝の火伏せ観音像めぐる
冬の月塀の瓦の片崩れ
日の透ける竹の模様の白障子
冬耕やかすかに匂ふ牛の糞
王冠の形に鶏頭枯れはじむ

撫で佛羽子板市の帰るさに
中日なる羽子板市の株の音かな
墨堤の寒さの端の浅草寺
蕭条の枯野に生命ひそみをり
ガサ市の煉炭火鉢久に見し

戸栗末廣

野澤あき

都鳥島に文楽見に行かな
蛸壺の風に鳴りゐるクリスマス
境内の薄日をあつめ冬桜
誰れ彼の見上ぐ師走の時計塔
寒雀にもとよりありぬ人見知り

冬の夜の職員室より電話くる
何するといふこともなき聖菓買ふ
極月の「呉春」の裏の香りけり
寒波きて右脳左脳もなかりけり
城跡の一望のあと冬桜

獅子座

山尾玉藻推薦

緒方佳子

極月の日に
出されある赤電話
百歳の爪
剪り揃へ年用意
年用意山側の窓
開け放つ
おでん鍋に火と灯の
入りし屋台かな

松山直美

末枯や大きな甕の
母屋口
大鍋に湯の沸き立てる
去年今年
真青なる宙のありたる
初詣
繭玉に触れて入りけり
繁昌亭

奥田順子

ツアーらに抹香匂ふ
初時雨
着ぶくれて石堀小路を
曲りけり
禅林に日の残りある
冬至かな
いちめんの石塔なりし
寒の晴

天谷翔子

小春日やまこと小さき
イルカの歯
母をしかり深くかぶりぬ
冬帽子
鳩時計ポッポと鳴けば
時雨けり
天窓の全開なりし冬
銀河

前田忍

大樽に薄日さしをる
冬桜
利酒や時雨のきざす
蔵明り
堀割へ水ころげ出づ
十二月
今浮きし水輪を鳩の
潜りけり

助口弘子

言へぬことありて寒紅
引きにけり
ブランコの鎖静まる
冬の月
九頭龍の山を遠くに
時雨かな
留守の家の芙蓉枯れ
きる音なりし

西畑敦子

剥製の鳥の眼光る
冬座敷
「かき広」の向う聖樹の
点滅す
牡蠣舟へ雨傘下りて
ゆきにけり
うな井と決め牡蠣船の
客となる